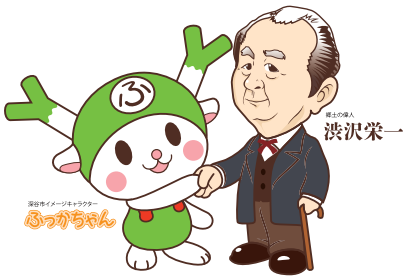
Discover FUKAYA

深谷の三偉人と史跡めぐりガイドブック

02－03●深谷の三偉人と世界文化遺産
04－05●渋沢栄一の生涯
06－08●深谷市に残る渋沢栄一関連史跡
09－10●尾高惇忠の生涯
11●韮塚直次郎の生涯
12－13●三偉人年表
14－15●史跡マップ
●各施設案内・深谷市へのアクセス



深谷の三偉人と世界文化遺産

２０１４年世界文化遺産となった「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、長い間生産量の限られていた生糸の大量生産を実現した「技術革新」と、世界と日本との間の「技術交流」を示す遺産の集合体です。富岡製糸場は、１８７２（明治５）年主要な輸出品であった生糸の品質向上と増産のため、明治政府により官営として設立されました。政府にあって設立に向けた計画や調整を行なった渋沢栄一。建設の中心となり活躍し、初代の場長となってからは工女の教育に力を入れた尾高惇忠。試行錯誤を経て焼き上げた煉瓦をはじめ、数々の建築資材調達のまとめ役を担った韮塚直次郎。３人はともに現在の深谷市の出身です。

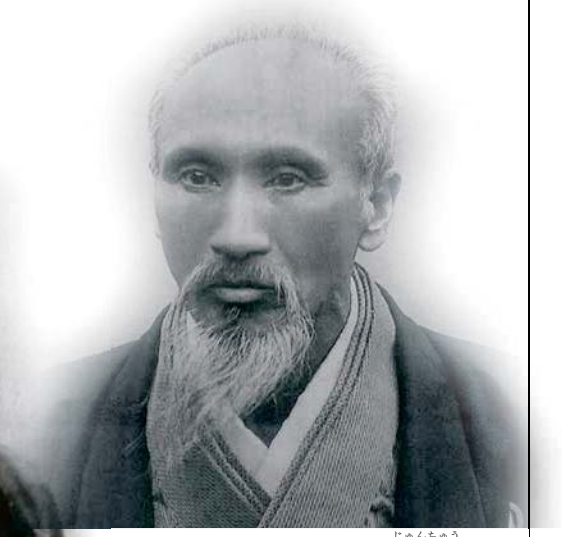
渋沢 栄一
（4 ページ～）

富岡製糸場

フランスの技術を導入し、全国より集めた工女たちに洋式の器械製糸技術を習得させました。郷土へ戻った工女たちは、指導者としてその技術を伝えました。1893（明治 26）年民間企業に払い下げられたのちも、製糸工場として 1987 年まで操業を続けました。創業当時に建てられた、木の骨組みに煉瓦を壁面として構成される「木骨煉瓦造」建物は、現在もほぼそのまま残されています。

（個人蔵）

韮塚　直次郎
（11 ページ）



尾高 惇忠
（9 ページ）

荒船風穴

自然の冷気を利用して蚕種（蚕の卵）を貯蔵する施設で、これにより当時１年に１回だった養蚕を複数回行うことが可能となりました。1905（明治 38）年から大正初め頃に造られた施設は、国内最大規模の貯蔵量を誇りました。

高山社跡

「清温育」を確立した高山長五郎が、1884（明治 17）年その養蚕法を教育普及するために設立した「養蚕改良高山社」にはじまります。「清温育」は、蚕室を温める「温暖育」や通風を重視する「清涼育」の長所を取り入れた飼育法です。現在残る住居兼蚕室は、1891（明治 24）年に建てられたもので、「清温育」を実践するのに最適な構造となっています。

田島弥平旧宅

蚕の育成に自然の通風が重要と考えた田島弥平が、1863（文久３）年考えを形にして建築した模範的な養蚕農家です。屋根の上に設けられたヤグラと呼ばれる換気窓がその特徴で、この様式は著書『養蚕新論』により各地に広まり、近代養蚕農家建築の標準となります。

世界遺産４点の写真は、群馬県から提供していただきました。

渋沢栄一の生涯

激動の時代

渋沢栄一は、1840（天保11）年武蔵国榛沢郡血洗島村の市郎右衛門とえいの子として生まれ、のちに青淵と号しました。渋沢家は、農業の他に藍玉の製造や養蚕も営む豪農でした。藍玉とは、藍の葉を染料に加工し、それを運搬しやすいように固形にしたものです。栄一は父の供をして藍葉の仕入れの旅に出るうちにコツを掴み、14歳の時には用事の父に代わり見事に仕入れをするなど商いの才能の片鱗を見せています。

栄一が17歳の時、渋沢家は村を治める岡部藩から500両の御用金拠出を申し付けられました。病の床にあった父に代わって出頭した栄一は、自分は父の名代であり、用件を持ち帰り父と相談しますと返答しました。対する役人は、身分を笠に着て強引に即断を迫りました。栄一は憤りますが、その主張を最後まで曲げず、帰って父に相談したうえで御用金を出すことになります。この時の役人に対する怒りは、栄一に身分制度への疑問を抱かせ、後の倒幕の企てや明治政府を辞して官尊民卑の打破を目指したことにも繋がっていきます。

22歳となった栄一は、いとこの渋沢喜作とともに学問や剣術の修練のため江戸へ行くことを父に願い出て、農閑期に限りその許しを得ました。江戸では、海保塾や千葉道場で学び、天下の志士と交わりました。時に文久年間、数年後に明治維新をむかえるこの頃、時勢は開国と攘夷、佐幕と尊皇という考えの対立で沸騰していました。栄一も尊皇攘夷思想に感化され、高崎城を乗っ取り、横浜へ攻め入って攘夷を果たすという過激な計画を立てるに至ります。この計画は、京都の情勢を見て帰郷した、いとこの尾高長七郎の強い反対に合い中止されましたが、栄一は喜作とともに追手を避けるため、京都へ逃れることになりました。

京都では、江戸遊学時代に面識を得た平岡円四郎を頼ります。円四郎は一橋慶喜に側近として仕える人物で、栄一や喜作の人物を見込んで一橋家への仕官を勧めました。はじめは固辞した栄一たちでしたが、二人を追って京都へ向かっていた長七郎からの手紙によって状況が一変します。手紙には、長七郎が誤って人を斬り捕縛されたこと、栄一が書いた幕政を批判する手紙を押収されたことが書かれていました。円四郎にも幕府から問い合わせがきていると告げられ、二人はこの難を逃れるため、一橋家への仕官を決めました。

農民の出ということもあり、低い身分からのスタートでしたが、領地での歩兵の募集を成功させるなど、仕事を着実にこなした二人は、一橋家でもその力を認められ信頼を置かれるようになります。

1866（慶応2）年主君の慶喜が将軍職に就いたため、栄一は図らずも幕臣となりました。そして、この年開催されるパリ万博に、将軍の名代として慶喜の弟徳川昭武が渡航することとなり、栄一はその随行者に選ばれ渡欧します。ヨーロッパで進んだ思想・文化・社会を体験したことは、栄一のその後の人生に大きな影響を与えました。1868（明治元）

●青い目の人形を抱く渋沢栄一

▲ 写真提供 / 渋沢史料館 ▲

年幕府が倒れたことにより、約2年の渡欧から帰国しました。

実業界を指導育成した時代

渡欧から帰国した栄一は、静岡藩で謹慎する慶喜のもとへ帰国の挨拶と報告をしに行きました。その後一時静岡藩に仕え日本最初の合本（株式）組織「商法会所」を設立しますが、1869（明治2）年明治政府より出仕を命じられ大隈重信の強い説得もあり政府に仕えることになりました。明治政府では民部省租税正（そぜいのかみ）（後に大蔵省へ編成）に任じられた他、改正掛長も兼務し、現在の社会まで通ずる諸制度の設立に携わりました。1873（明治6）年国家予算をめぐる大久保利通との対立により官を辞した栄一は、第一国立銀行を設立します。その後、ヨーロッパで学んだ知識を活かし、およそ500社の企業の設立に関与しました。栄一の事業に対する考え方は、いたずらに私利私益に走るのではなく公利公益も考え、社会全体を豊かにするというもので、「道徳経済合一説」と呼ばれています。その根底にあったのは「論語」の精神である「忠恕（ちゅうじょ）の心」、すなわち、まごころと思いやりでした。

社会公共事業に尽力した時代

1874（明治7）年栄一は、東京府からの要請で「東京市養育院」を設立しました。これは身寄りのない子供や老人を養う施設で、栄一は終生にわたり院長を務めます。また、このほかにも孤児院や病院、学校の設立や生活困窮者を救うための「救護法」制定に尽力するなど、関わった社会公共事業は600にも及びます。こうした栄一の生き方は、論語の教えの他、誰にでも分け隔てなく優しく親切だった母えいの影響を垣間見ることが出来ます。

昭和に入り、日米関係に暗雲が立ち込めた折には、かねてから親交のあったギューリック博士と協力し、人形の交換による交流事業を行いました。日本からは58体の日本人形を贈り、アメリカからは1万2739体の青い目の人形が届けられ、現在も県内に12体が残っています。このほかアメリカのグラント大統領やインドの詩人タゴールらとも親交を結び、1931（昭和6）年には中華民国水災同情会会長として義捐金を募るなど、幅広い国際親善に尽くしました。

渋沢栄一記念館

栄一翁の遺墨や写真など、たくさんの資料が展示されています。

●第一国立銀行

深谷市に残る渋沢栄一関連史跡

「中の家」の歴史と渋沢家の人々

血洗島の開拓者の一つとされる渋沢一族は、分家して数々の家を興しました。「中の家」もその一つで、呼び名は各渋沢家の位置関係に由来しています。「中の家」の当主は代々市郎右衛門を名乗りました。栄一の父元助も、親戚の「東の家」から男子のいなかった「中の家」に婿に入り市郎右衛門を名乗りました。学問に長け、勤勉で律儀な人で、農業の他に養蚕や藍玉づくりとその販売で財をなし、一時傾きかけた家運を再興しました。

1863（文久3）年栄一が家を出ると、妹ていが親戚の須永家から才三郎を婿に取って「中の家」を継ぎます。才三郎は勤勉誠実な人柄で、市郎と名乗り、ていと共によく家を守りました。信望も厚く、合併により八基村が誕生する際にも奔走し、2代目村長、県会議員を歴任し、小山川の治水にも尽力しました。また、農家の協力体制の必要性を唱え、1907（明治40）年には八基信用組合を設立しています。

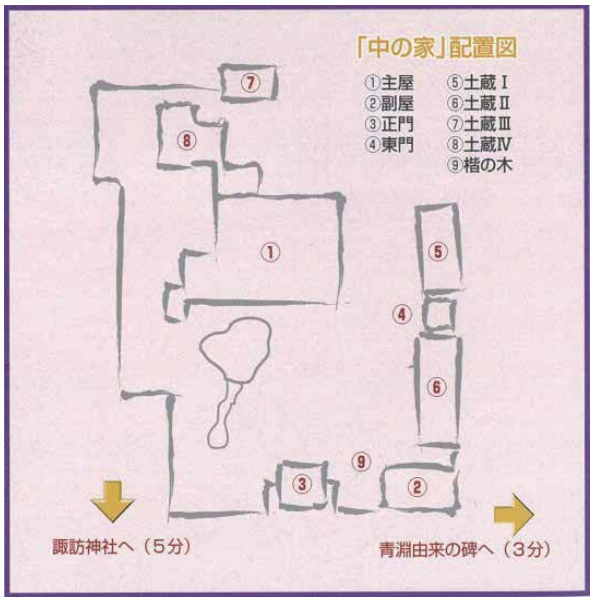
市郎・ていの長男である元治は、東京帝国大学工科大学電気工学科を卒業し、ヨーロッパ等で学んだ後、逓信省に勤務し勃興期の電気事業において、民間事業者の指導や電気事業法の確立に貢献しました。また、東京帝国大学教授や名古屋帝国大学の初代総長を歴任するなど、教育界にも功績を残し、日本の電気工学の進展に大きく貢献しました。1955（昭和30）年には文化功労者に選ばれました。12歳で上京するまでと、退職後の晩年を「中の家」で過ごしました。

市郎・ていの次男である治太郎は、兄の元治に代わり「中の家」を継ぎました。村会議員や村長、県会議員を歴任した他、県養蚕組合連合会等の設立、運営にも参画しています。耕地整理組合や青淵図書館等を設立するなど、多方面で郷土の発展に貢献しました。

元治の長男である亨三は、「中の家」を社会に役立てることを考えていましたが、早くに亡くなり、その妻多歌子が遺志を継ぎ、昭和58年外国人留学生の日本語および日本文化研修施設「学校法人青淵塾渋沢国際学園」を設立します。学園では、2000（平成12）年の法人解散までに43か国、679名の留学生が学びました。

●副屋
1911（明治44）年の上棟で、取引の場として使用された建物のため「お店」と呼ばれていました。市郎が近隣の子供に漢学を教えるため学者を住まわせた時期や、八基村農業協同組合事務所として使われた時期もあったそうです。

●中の家配置図



●主屋
1895（明治28）年栄一の妹夫妻（市郎・てい）により上棟されたもので、2階屋根の上にヤグラを持つ典型的な養蚕農家の形を残しています。奥の十畳間は帰郷する栄一が滞在するため、材料を吟味し特に念入りに作らせたものといわれます。

清風亭（せいふうてい）

1926（大正 15）年栄一に続き第一銀行の頭取を務めていた佐々木勇之介の古希（70 歳）を記念して、行員たちによって誠之堂の並びに建てられました。勇之介は勤勉精励、方正謹厳な性格で知られ、栄一の精力的な活躍もその補佐によるところが大きかったと考えらます。当初は勇之介の雅号をとり「茗香記念館」と称されましたが、後に「清風亭（せいふうてい）」と呼ばれるようになりました。設計は銀行建築の第一人者である西村好時で、建築面積 168 ㎡の鉄筋コンクリート造平屋建です。屋根のスパニッシュ瓦、ベランダのアーチ、出窓のステンドグラスや円柱装飾など、当時流行していたスペイン風の様式が採られています。

1923（大正 12）年の関東大震災を契機に、建築構造の主流は煉瓦造から鉄筋コンクリート造に代わりましたが、その初期に建てられた清風亭は建築史上貴重な建物で、平成 16 年３月 23 日埼玉県指定有形文化財に指定されています。

誠之堂（せいしどう）

1916（大正５）年渋沢栄一の喜寿（77 歳）を記念して第一銀行行員たちの出資により建築されました。誠之堂（せいしどう）の命名は栄一自身によるもので、儒教の代表的な経典の一つ「中庸」の一節「誠者天之道也　誠之者人之道也（誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり）」にちなんだものです。設計は当時の建築界の第一人者であった田辺淳吉で、「西洋風の田舎屋」「建坪は 30 坪前後」という栄一の希望に沿いながら独自の発想が凝縮されています。

北側外部壁面には、煉瓦による装飾積みで「喜寿」の文字が表されています。また、外壁はあえて色ムラのある煉瓦をリズミカルに配置することで装飾性と変化が生み出されています。大広間のステンドグラスは森谷延雄（もりやのぶお）によるもので、漢代の貴人と侍者、それを饗応する人々の像は、栄一を貴人に見立て、喜寿を祝う情景と考えられます。大広間の円筒型の漆喰天井（ヴォールト天井）は、石膏レリーフにより雲、鶴、寿の文字等が配され朝鮮風となっている一方、次之間の天井は、日本的な網代（あじろ）天井で、数寄屋造りの様式が取り入れられています。建築面積は 112 ㎡で煉瓦造平屋建、外観は英国農家に範を取りつつ、室内外の装飾には中国、朝鮮、日本など東洋的な意匠が取り入れられ、それらがバランス良く調和しています。平成 15 年５月 30 日には重要文化財に指定されました。

●「喜寿」煉瓦積

●大広間ステンドグラス

深谷市への移築

誠之堂・清風亭はもともと第一銀行の保養・スポーツ施設「清和園」（東京都世田谷区瀬田）の敷地内に並んで建てられていました。当初は銀行関係者のための集会施設であったものですが、昭和 46 年清和園の敷地は多くを聖マリア学園（セント・メリーズ・インターナショナル・スクール）に売却され、両建物は学園の施設として利用されました。平成９年学園が施設拡充を計画し、両建物が取壊しの危機に瀕した時、深谷市は渋沢栄一生誕の地として、栄一にゆかりのある貴重な建物を譲り受け、市内に移築復元することを決めました。文化財的価値の高い煉瓦構造物の移築は稀で、検討委員会により煉瓦壁をなるべく大きく切断して搬送し移築先で組み直す「大ばらし」を応用した日本初の工法が採用されました。平成 10 年２月から約２年間の解体・復元工事を経て、平成 11 年８月に移築復元は完成し、11 月の公開から現在まで多くの見学者を得ています。

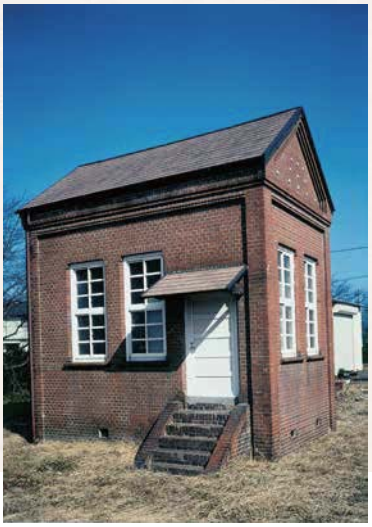
日本煉瓦製造株式会社旧煉瓦製造施設

1886（明治19）年明治政府は、欧米列強に対抗するため日比谷周辺を近代建築による官庁街とする計画を立ち上げ、臨時建築局を設置します。官舎は西洋風の煉瓦造と決まり、多量の煉瓦が必要となりましたが、財政的に厳しい政府は、実業界の重鎮渋沢栄一に大量生産が可能な機械式煉瓦工場の設立を要請します。

栄一は、従来から瓦生産が盛んで煉瓦のもととなる良質な粘土が採れること、また、小山川から利根川、江戸川を経て東京方面への煉瓦輸送が可能であるという立地から上敷免村を工場建設地として推薦しました。

翌年栄一他4名の連名で「会社設立願」を東京府へ、「煉瓦製造所設立願」を埼玉県へ提出し、それぞれ認可を受けます。1888（明治21）年まず事務所が、続いて当時最新式のホフマン輪窯が建設されました。蒸気汽罐をはじめとする機械もドイツから輸入されました。同年9月1号窯に火が入り、10月には臨時建築局より煉瓦22万本の発注を受けます。翌年には2、3号窯が完成し操業を拡大し、最盛期には6基の窯が稼働しました。

平成18年煉瓦需要の減少という時代の波に押され、約120年に及ぶ会社の歴史に幕が降ろされました。



●旧変電室
蒸気機関から電動機に動力を切り替えるため、1906（明治39）年市内で最初に電灯線を引き、変電室として建てられたものです。間口5.83m、奥行4mの煉瓦造平屋建、切妻屋根、コロニアル葺です。内部の壁は漆喰塗、床は板張りです。

●ホフマン輪窯6号窯
ドイツ人ホフマンが考案した煉瓦の連続焼成が可能な輪窯です。1907（明治40）年の建造で、長さ56.5m、幅20m、高さ3.3mの煉瓦造りです。内部を18の部屋に分け、窯詰・予熱・焼成・冷却・窯出しの工程を順次行いながら移動し、およそ半月かけて窯を一周しました。生産能力は月産65万個で、1968（昭和43）年まで約60年間にわたり煉瓦を焼き続けました。

●旧事務所
工場建設や煉瓦製造の指導にあたったドイツ人煉瓦技師チーゼの居宅兼事務所として、1888（明治21）年頃に建てられました。チーゼの帰国後は会社の事務所として使用され、1978（昭和53）年からは煉瓦史料館として貴重な文書・写真等を展示しています。

●備前渠鉄橋
1895（明治28）年工場から深谷駅までの4㎞間に、日本で最初の専用鉄道が敷設され、煉瓦の大量輸送が可能となりました。備前渠にかけられた鉄橋にはI字形鋼板を橋桁とする「ポーナル型プレート・ガーダー橋」が採用されました。橋台の煉瓦は日本煉瓦で焼かれたものです。専用線は昭和50年の廃止後、深谷駅までの遊歩道となっています。

尾高惇忠（じゅんちゅう）の生涯

尾高惇忠は、１８３０（天保元）年武蔵国榛沢郡下手計（しもてばか）村で名主をつとめる勝五郎とやへの子として生まれ、通称を新五郎、藍香（らんこう）と号しました。やへは栄一の父市郎右衛門の姉で、惇忠は栄一の10歳年上のいとこにあたります。幼少より書を好み、17歳の頃には家で塾を開き近隣の子供たちに教えるようになります。栄一にも論語をはじめとする学問を教え、大きな影響を与えました。惇忠は10代で水戸学に感化され、尊皇攘夷思想を抱くようになり、ペリーの来航以降混乱する時勢の中で、１８６３（文久３）年栄一らとともに高崎城乗っ取りや横浜商館焼き討ちを企てます。計画は中止され、栄一が京都へ逃れる一方、名主をつとめる惇忠は郷里に残り、水戸天狗党との繋がりを疑われ一時岡部藩の陣屋に入牢しています。しかし、その後栄一が徳川慶喜に仕えると考えを佐幕派へ変えて行き、１８６８（明治元）年官軍が江戸を目指すと彰義隊や振武軍に参加し飯能戦争を戦いました。

翌年岩鼻県は農業用水備前渠（びぜんきょ）の取水口の位置を、強引に変更しようとします。惇忠はこの専横に、流域農民の代表として政府に直接の陳情を行い、事件を解決に導きました。この時民部省の役人であった玉乃世履（たまのせいり）に人柄や文章を認められた惇忠は、民部省に仕えることになります。そして、官営富岡製糸場の設立には用地の選定から携わりました。建設資材の煉瓦やモルタルは、当時の日本ではほとんど知られていませんでしたが、韮塚直次郎に煉瓦づくりを、煉瓦を接着するためのモルタルは、日本固有の漆喰（しっくい）を改良してまかなうことを考え、同郷の左官職人堀田鷲五郎（わしごろう）・千代吉親子に考案を任せ、製糸場は見事に完成しました。工女の募集は、フランス人技師の飲む赤ワインが若い娘の血と誤解され困難を極めましたが、娘の勇（ゆう）を郷里から伝習工女第一号として呼び寄せ、事態を打開しました。富岡製糸場初代場長となってからは、特に工女の教育に重点を置き、一般教養の向上と場内規律の維持につとめました。人々は惇忠の誠実な人柄に信頼を寄せ、自分の娘を工女の一員とすることを誇りに思うようになりました。

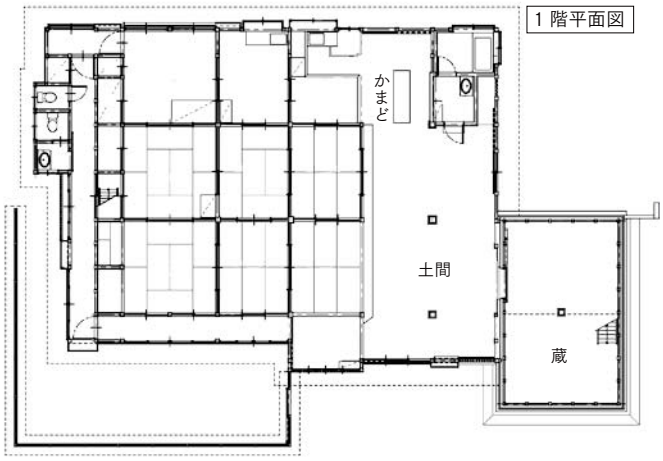
１８７６（明治９）年所長の職を辞した惇忠は、翌年栄一の依頼を受け第一国立銀行に入り、岩手県盛岡支店の支配人となります。岩手では、新進の実業家を指導したり、北上回漕会社の設立に携わったりして、東北地方の産業の発展に大きく貢献しました。１８８７（明治20）年には同行仙台支店支配人に転じ、１８９２（明治25）年にその職を辞して自適の生活入るまで活躍を続けました。

●藍香尾高翁頌徳碑
鹿島神社（下手計地内）にたたずむ惇忠の徳を讃える碑です。栄一らによって建てられたもので市の指定文化財になっています。

尾高惇忠生家

尾高惇忠生家は、江戸時代後期に惇忠の3代前にあたる磯五郎が建てたものと伝わっています。農業に加え、菜種油の搾油・販売も行ったので油屋の屋号で呼ばれました。その他にも人を雇って藍玉や養蚕などをする大きな農家でした。主屋の1階は大きく分けて東側が土間、西側が和室・洋室・食堂兼用の台所等となっています。和室は6畳間が4間、8畳間が2間あり、廊下に面した南の8畳間には床の間が付いています。土間には煉瓦積のかまどと後補された浴室が残っています。土間の東側は土蔵へ接続されていますが、この土蔵は後からその場所に建てられたもので、当初は土間が東に延び、商いをする空間をより広くとっていたものと考えられます。2階は6畳間と2間の8畳間、板張りの小屋裏からなっており、南西の間では惇忠や栄一らが倒幕の密議を行ったといわれています。2階の屋根の上には、養蚕農家の特徴である換気用のヤグラ（天窓や抜気窓ともいわれる）が残っていますが、これは明治以降に後補されたものです。その他、洋室や食堂兼用の台所が残っているように、この場所に住んだ人々の暮らしに沿った改修がされてきたことがわかります。

主屋の裏に建つ煉瓦蔵の内部は木構造で、それを包むように煉瓦が積まれ外壁が構成されています。2階建てで、1階は東西に分かれ、生活用品の収納に使用されました。使用されている煉瓦は、市内にあった日本煉瓦製造会社のものと思われます。内部の墨書から、大正12年に改築されたものであることがわかっています。



●主屋 1.2 階平面図

●尾高惇忠生家

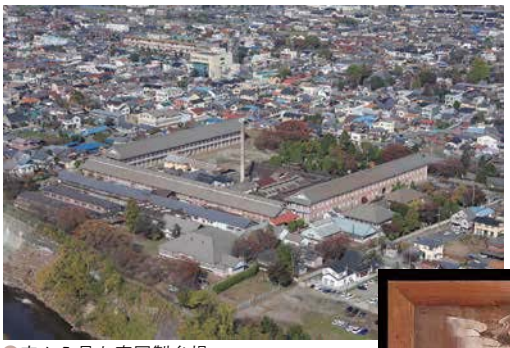
韮塚直次郎の生涯

直次郎は1823（文政6）年搾油工として尾高家で働いていた久保田熊次郎と尾高家住込みの家事使用人であった銀との間に生まれました。直次郎は生まれてから7歳までを尾高家で過ごしますが、一家が尾高家の口利きで明戸村の農業兼油問屋の韮塚仙之介に養子に入ったことにより、韮塚姓となります。しかし、三年後に仙之介が、その翌年には熊次郎が亡くなってしまいました。生活の苦しい母子を助けたのも尾高家で、直次郎は20歳になると、農業や油問屋としての仕事を学ぶため、奉公に入ります。奉公は8年間に及び、様々な技術を習得した直次郎は明戸へ戻り、新井村（現在の深谷市新井）福島家の娘と結婚、2人の娘を授かりますが、数年後に離縁しています。直次郎はその後、家出して深谷宿で働いていた彦根藩士の娘美寧（みね）を見初め、尾高家の見立て養女としてもらい、結婚します。直次郎32歳、美寧22歳の時でした。

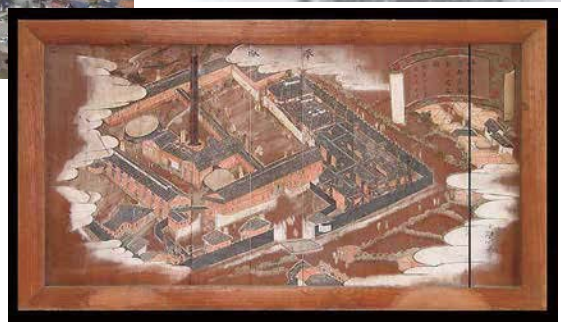
1869（明治2）年、岩鼻県が農業用水備前渠の取水口変更を強引に進めようとして起こった騒動では、直次郎は尾高惇忠とともに事態の解決に奔走しました。また、翌年富岡製糸場の建設の中心となった惇忠は、直次郎を資材調達のまとめ役とします。直次郎は、その期待に応えるため、娘夫妻に実家を任せて富岡に引越しました。製糸場の建設で、特にその調達に苦労したのは数十万個の煉瓦で、地元明戸の瓦職人を束ねた直次郎は外国人技師バスティアンから煉瓦の素材や性質を聞き、材料の粘土探しからはじめます。幸い富岡から程近い笹森稲荷神社（現甘楽町福島）付近から適した粘土層を発見し、周辺に焼成窯を設けましたが、試作は失敗の連続でした。そこで、見本の煉瓦を砕いて水の中にいれ、沈殿した砂粒からヒントを得て、砂の配合を変えながら試行錯誤を行い、ついに煉瓦を完成させました。

製糸場完成後も製糸場の賄方（食堂）を請け負った直次郎は、1875（明治8）年、笹森稲荷神社の本殿に縦5尺横10尺の大絵馬を奉納し、事業の成功を神に感謝しています。製糸場を鳥瞰する構図の絵馬は、甘楽町指定重要文化財となっています。また、1880（明治13）年には永明稲荷神社（深谷市田谷）にも同様の絵馬を奉納してあり、これも歴史上重要なものとして深谷市の文化財に指定されています。

●永明稲荷神社（深谷市田谷）
韮塚直次郎が富岡製糸場図大絵馬を奉納した社です。



●空から見た富岡製糸場
（写真提供 / 群馬県）



●富岡製糸場図大絵馬（市指定文化財）

三偉人年表

西暦	年号	年齢	渋沢栄一	年齢	尾高惇忠	年齢	韮塚直次郎	出来事
一八二三	文政六年							
一八二九	文政一二年							
一八三〇	天保元年							
一八三二頃	天保三年頃							
一八三六	天保七年							
一八四〇	天保一一年	1	武蔵国榛沢郡血洗島村に市郎右衛門、えいの子として生まれる。					
一八四一	天保一二年							
一八四二	天保一三年							
一八四六	弘化三年	7	惇忠に論語をはじめとする学問を学ぶ。					
一八四九頃	嘉永二年頃							
一八五四頃	安政元年頃							
一八五八	安政五年	19	惇忠の妹ちよと結婚。					
一八六一	文久元年	22	江戸の海保塾や千葉道場で文武を学び、天下の志士と交わる。					
一八六三	文久三年	24	高崎城乗っ取りをはじめとする討幕を計画するが、尾高長七郎（惇忠の弟）の説得により中止する。渋沢喜作とともに京にのぼる。					
一八六四	元治元年	25	一橋家の用人平岡円四郎のはからいで喜作と共に一橋家に仕官する。					
一八六七	慶応三年	28	将軍徳川慶喜の弟昭武に従いフランスのパリ万博に随行する。					
一八六八	明治元年	29	フランスより帰国し、一時静岡藩に仕える。					
一八六九	明治二年	30	明治政府に仕官。租税正となる。					
一八七〇	明治三年							
一八七一	明治四年							
一八七二	明治五年							
一八七三	明治六年	34	大蔵省を辞し、第一国立銀行総監役となる。					
一八七四	明治七年	35	東京養育院の事務をつかさどる。					
一八七五	明治八年							
一八七六	明治九年							
一八七七	明治一〇年							
				1	武蔵国榛沢郡下手計村の名主の家に生まれる。諱は惇忠、通称新五郎、号は藍香（らんこう）。			
				7	川越藩師範役大川平兵衛に神道無念流の剣術を学ぶ。			
				12	父と水戸藩主徳川斉昭の追鳥狩を見学し、水戸学に興味を抱く。			
				17	自宅に塾を開き、栄一をはじめ近在の子供たちを教える。			
				20	尾高家へ奉公に入る。			
				27	奉公から韮塚家へ戻る。新井村の福島家の次女と結婚し、翌年娘えいが誕生する。数年後に離縁する。			
				29	栄一とともに藍玉販売のため長野方面へ出かける。「巡信記詩」			
				32	美寧と結婚する。			
				34	高崎城乗っ取りをはじめとする討幕を計画するが、尾高長七郎（惇忠の弟）の説得により中止する。			
				35	尾高長七郎が誤って通行人を斬り殺し入牢する。天狗党との繋がりを疑われ岡部藩に入牢する。			
				39	渋沢喜作らと彰義隊結成に参加。意見の対立により同隊を抜け振武軍を結成。飯能で官軍と戦い敗れる。末弟渋沢平九郎（栄一の養子）自刃。			
				40	備前渠事件起こる。惇忠の立案に関係14か村の調印をもって民部省へ急訴する。			
				41	玉乃世履に見出され明治政府へ出仕する。民部省に入る。			
				42	富岡製糸場建設工事に着手。			
				43	工女を募集するが応募がなく、娘ゆうを伝習工女第一号とする。富岡製糸場操業開始。			
				44	英照皇太后・昭憲皇后の両宮が富岡製糸場を行啓。			
				47	富岡製糸所へ改称。			
				48	富岡製糸所長の職を辞する。栄一の依頼により第一国立銀行へ入行。岩手県盛岡支店の支配人として同地に勤務する。			
						1	久保田熊次郎・銀の間に生まれる。	
						7	父熊次郎が明戸の韮塚仙之介の養子となり、韮塚姓へ。	
						10	韮塚仙之介死去し、翌年熊次郎も死去する。	
								アヘン戦争
						32	美寧と結婚する。	
						47	備前渠事件解決のため、惇忠と共に奔走。	
						48	惇忠より資材調達と現場取締の御用達を命じられる。	
						49	工事の本格化に備え、明戸の家を娘夫妻に託し、富岡へ引っ越す。	
						50	富岡製糸場操業開始。賄方をつとめる。	
						53	笹森稲荷神社に大絵馬を奉納する。	

ペリー来航
ハリス下田に着任
日米通商条約締結
外国船下関を砲撃
長州征伐開始
一橋慶喜徳川第十五代将軍となる
五箇条の御誓文
戊辰戦争終結
版籍奉還
廃藩置県
地租改正
西南戦争

一八七八	明治一一年	39 明治38年まで、東京商法会議所・東京商工会・東京商業会議所の会頭をつとめる。
一八七九	明治一二年	40 前アメリカ大統領グラント将軍の歓迎会を行う。
一八八〇	明治一三年	
一八八二	明治一五年	43 妻ちよ死去。
一八八三	明治一六年	44 伊藤兼子を妻に迎える。
一八八五	明治一八年	46 東京府の経営廃止条例の決定により、東京養育院の存続に努力する。
一八八七	明治二〇年	48 日本煉瓦製造会社設立に携わる。翌年開業。
一八八九	明治二二年	
一八九二	明治二五年	
一八九六	明治二九年	57 国立第一銀行が株式会社第一銀行となり、その頭取となる。
一八九八	明治三一年	
一九〇〇	明治三三年	61 男爵を授けられる。
一九〇一	明治三四年	
一九〇二	明治三五年	63 アメリカ及びヨーロッパ諸国を兼子夫人と共に訪問し、国際親善につとめる。
一九〇八	明治四一年	69 八基小学校において「一村の興隆と村の自治的精神」と題して講演を行う。
一九〇九	明治四二年	70 金融機関以外の事業会社（約60社）の役職を辞任する。渡米実業団の団長としてアメリカに渡る。
一九一四	大正三年	75 駐日実業株式会社の設立を機に中国を視察し、親善につとめる。
一九一五	大正四年	76 パナマ運河開通記念博覧会の見学をかねて日米親善のため渡米する。
一九一六	大正五年	77 第一銀行頭取をはじめ、金融界からも引退し、社会公共事業に尽力する。血洗島諏訪神社に拝殿を寄進する。
一九二〇	大正九年	81 子爵を授けられる。
一九二一	大正十年	82 ワシントン軍縮会議の視察をかねて渡米し、平和外交を促進する。
一九二三	大正一二年	83 関東大震災が起こり、大震災善後会副会長となる。
一九二六	大正一五年	87 白河楽翁公（松平定信）を記念し、東京市養育院長として第17回目の祭典を行う。日本放送協会（NHK）の顧問となる。
一九二七	昭和二年	88 日本国際児童親善会会長として、日米の人形の交換につとめる。
一九二九	昭和四年	90 宮中に参内、御陪食の光栄に浴する。
一九三〇	昭和五年	91 救護法の実施について政府に働きかける。
一九三一	昭和六年	92 11月11日午前1時50分永眠。同月14日御沙汰書を賜る。法名　泰徳院殿仁智義譲青淵大居士。東京都台東区の谷中の墓地に葬られる。

56 北上川の舟運を近代化するため「北上回漕会社」を設立する。

58 第一国立銀行仙台支店の支配人に転じる。

60 有志と議して宮城貯蓄植林組合を設立する。

63 加藤彦七郎と共同研究で藍靛製造法の特許を得る。第一国立銀行を辞して、自適の生活に入る。

72 1月2日永眠。遺体は深川区福住町から郷里下手計村に送られ葬られる。「藍香院惇徳格知居士」

58 永明稲荷神社に大絵馬を奉納する。

65 日本煉瓦製造会社の建設にあたり、地元住民への説明等に尽力する。

76 1月27日永眠。

国会開設の詔

大日本帝国憲法発布

日清戦争

日英同盟成立

日露戦争

第一次世界大戦

パリ講和会議

国際連盟成立

排日移民法案、アメリカ上院・下院を通過

ラジオ放送開始

世界大恐慌

救護法制定

満州事変

史跡マップ

諏訪神社

旧血洗島村の鎮守で、拝殿は栄一が寄進したものです。

鹿島神社

旧下手計村の鎮守です。

渋沢平九郎追懐碑

栄一の見立て養子となった渋沢平九郎（惇忠の弟）を偲んで建てられたもので、平成 26 年東京都台東区谷中から「中の家」へ栄一父母の碑とともに移設され、並んで建っています。

可堂桃井先生碑

北阿賀野の百姓に生まれ、苦学の末に一流の学者となった桃井可堂の名を刻んだ碑。撰文は渋沢栄一によるものです。

青淵由来之跡の碑

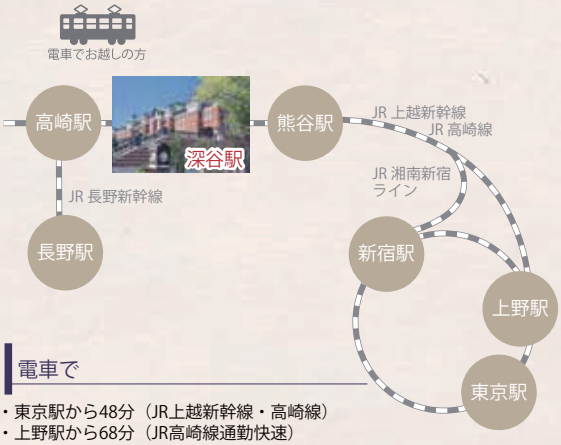
栄一が雅号とした青淵の由来となった場所に建つ碑です。清浦奎吾の揮毫、栄一の甥、渋沢治太郎が撰書したものです。

備前渠改閘碑記の碑

（びぜんきょ　かいこう　ひき　ひ）

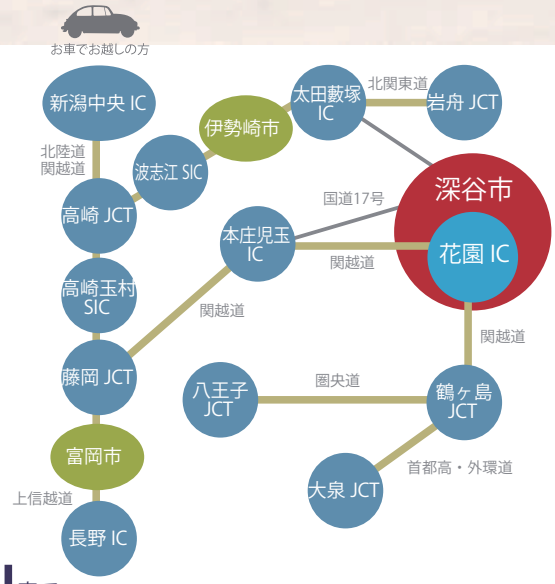
多くの農地を潤した農業用水備前渠の歴史を記した碑。題字は徳川慶喜、撰文は渋沢栄一によるものです。

深谷市へのアクセス



電車で

- 東京駅から48分（JR上越新幹線・高崎線）
- 上野駅から68分（JR高崎線通勤快速）
- 新宿駅から70分（JR湘南新宿ライン特別快速）
- 長野駅から73分（JR長野新幹線・高崎線）



車で

- 八王子JCTから51分　（圏央道・関越道）
- 大泉JCTから36分　（首都高・外環道・関越道）
- 新潟中央ICから151分（北陸道・関越道）
- 長野ICから102分　（上信越道・関越道）
- 岩舟JCTから50分　（北関東道・県道69号）

各施設案内

渋沢栄一記念館

休館日	年末年始（12月29日から１月３日） 清掃・展示作業により入室できないことがあります。 事前にお問い合わせください。
見学時間	午前９時～午後５時
料金	無料
所在	〒366-0002　深谷市下手計1204
問合せ先	渋沢栄一記念館 電話：048-587-1100

旧渋沢邸「中の家」

休館日	年末年始（12月29日から１月３日）
見学時間	午前9時～午後５時
料金	無料
所在	〒366-0006　深谷市血洗島247番地１
問合せ先	渋沢栄一記念館 電話：048-587-1100

誠之堂・清風亭

休館日	年末年始（12月29日から１月３日）
見学時間	午前９時～午後５時
料金	無料
所在	〒366-0837　深谷市起会110番地１
問合せ先	深谷市教育委員会文化振興課 電話：048-577-4501 大寄公民館　電話：048-571-0341

日本煉瓦製造株式会社旧煉瓦製造施設

開館日時	史料館（土・日曜　午前９時～午後４時） ホフマン輪窯 （臨時公開または史料館開館日時内に 10名以上の団体予約のみ） ※平成27年3月現在
料金	無料
所在	〒366-0029　深谷市上敷免28番地10
問合せ先	深谷市教育委員会文化振興課 電話：048-577-4501

尾高惇忠生家

休館日	年末年始（12月29日から１月３日）
見学時間	午前９時～午後５時
料金	無料
所在	〒366-0002　深谷市下手計236番地
問合せ先	渋沢栄一記念館 電話：048-587-1100

H27.3　10,000

◎このガイドブックは埼玉県ふるさと創造資金の補助を受けて作られました。